

# 卒業研究概要

提出年月日 2012年 1月 31日

卒業研究課題 個人の性格によって変化するパーソナルスペースの形状比較			
学生番号	C07-102	氏名	村田 誠弥
概要	指導教員 神田 智子 准教授		印
<p>パーソナルスペース（以降「PS」）とは、個人の身体を取り巻く目に見えない空間領域であり、人はこの空間を持ち運びながら現実空間での社会生活を営んでいる。現実空間での PS は人が他人との様々な相互作用を持つ時に重要な役割を果たしており、対人場面において無意識のうちにこの空間を変化させることで円滑な対人関係を営んでいる [1]。現実空間での PS に関しては、「異性の相手より同性の相手の方が PS の距離が短い [2]」という性別差や「外向的性格の人は内向的性格の人より PS の距離が短い [3]」という性格差など多くの研究がなされてきた。昨今では、セカンドライフや PLAYSTATION Home などのメタバースと呼ばれるインターネット上の 3D 仮想空間が普及し始めており、メタバースにおける対人行動に対する理解を深めることが重要である。しかし、メタバースにおける PS の研究は少なく、メタバースにおいてユーザの分身となるアバターがもつ PS についての存在の有無に関する研究はまだ初期段階である。そこで本研究では、メタバースにおける身体性の重要性を示すことを目的とし、[3]で示された現実空間における PS の特性がメタバースにおいても同様に見られること、すなわち、『現実空間同様にメタバースでも外向的性格の人は内向的性格の人より PS の距離が短い』という仮説を立て評価実験を行った。</p> <p>測定実験では、実験参加者に対して 8 方向から他人が接近し、実験参加者が「これ以上近づいてほしくない」という時点でストップをかけ、その時の対人距離を測定する Stop-Distance 法を用いて現実空間とメタバースの PS を測定した。なお、実験は現実空間とメタバース共に実験参加者の性別に対して同性と異性の接近者を使用し、現実空間では人、メタバースではアバターを接近者とする。また、予め実験参加者の性格を分類するため、BigFive [4] の外向性尺度の日本人の平均値 [5] を元に実験参加候補者の外向性、内向性を評価した。分析の対象となった実験参加者の人数は、男子大学生 12 名（外向性 6 名、内向性 6 名）、女子大学生 11 名（外向性 5 名、内向性 6 名）である。</p> <p>分析内容と結果は以下の通りである。「外向性格の人は内向性格の人より PS の距離が短い」という仮説を検証するために、各空間ごとに「同性外向と同性内向」の PS 間、「異性外向と異性内向」の PS 間で t 検定を行った。男性参加者は対同性時、「同性外向&lt;同性内向」の方向に現実空間では前方、左、右後に有意差がみられ、メタバースでは 8 方向全てに有意差がみられた。対異性時、「異性外向&lt;異性内向」の方向に現実空間では前方と左に有意差がみられ、メタバースでは 8 方向全てに有意差がみられた。このことから、男性参加者は現実空間では前方と左、メタバースでは全方向に対して接近者の性別に関わらず、内向性格の人より外向性格の人の方が PS を有意に短くとっていることがわかる。女性参加者は対同性時、現実空間では有意差はみられなかったが、メタバースでは「同性内向&lt;同性外向」の方向に横から斜め後にかけて有意差がみられた。対異性時、「異性内向&lt;異性外向」の方向に現実空間では前から左にかけて有意差がみられ、メタバースでは右前、後に有意差がみられた。このことから、女性参加者は現実空間とメタバースのどちらの空間においても接近者の性別に関わらず、自身の性格によって PS を変化させないことがわかる。追加分析として、外向性格の人と内向性格の人では接近者の性別が PS に及ぼす影響が異なることを検証するために、各空間ごとに「外向同性と外向異性」の PS 間、「内向同性と内向異性」の PS 間で t 検定を行った。外向的な男性参加者は、現実空間では「外向同性&lt;外向異性」の方向に左、右後に有意差がみられ、メタバースでは 8 方向全てに有意差はみられなかった。内向的な男性参加者は、現実空間では有意差はみられず、メタバースでは「内向同性&lt;内向異性」の方向に左、右後に有意差がみられた。このことから、男性参加者は自身の性格に関係なく、現実空間とメタバースのどちらの空間においても接近者の性別によって PS を変化させないことがわかった。女性参加者は、現実空間とメタバースのどちらの空間においても自身の性格に関係なく、「同性&lt;異性」の方向に 8 方向全てに有意差がみられた。このことから、女性参加者は自身の性格に関係なく、接近者が異性より同性の方がパーソナルスペースを短く取ることがわかる。</p> <p>以上の結果から、男性参加者の場合のみ仮説を支持する結果が得られた。また、女性参加者は現実空間とメタバースのどちらの空間においても接近者の性別によって PS を変化させたのに対し、男性参加者は PS を変化させなかった。これらのことから、男性参加者は接近者の性別より自身の性格によって PS を変化させ、女性参加者は自身の性格より接近者の性別によって PS を変化させると言える。これは、男性が持つ「縄張り意識」、女性は「女性同士の接触行動が多い」と現実空間で言われていることが現実空間とメタバースのどちらの空間においても反映されたと考えられる。そして、有意差がみられなかった方向が所々異なったのは、現実空間では実験参加者が後を振り向くことが出来ず、後方から接近してくる接近者（人）との距離感がつかめなかったことに対し、メタバースでは実験参加者が俯瞰視線であった為、距離感をつかむことが可能だったことが原因だと考えられる。よって、実験環境の視点の統一などの見直しが必要であると考えられる。</p> <p>これらのことにより、実験参加者は現実空間同様にメタバースにおいても実際に体があるかのように身体性を持ち続けていることが示唆された。今後は、1 人称視点のメタバースでの被接近実験や、異文化での PS の形状比較を行うことで現実空間とメタバースにおける PS をさらに検証することが望まれる。</p>			
<p>[1] 渋谷昌三:人と人との最適距離, 日本放送出版協会, pp. 11-40, (1990)</p> <p>[2] 渋谷昌三:パーソナルスペースの形態に関する一考察, 山梨医大紀要 第 2 巻, pp. 41-49, (1985)</p> <p>[3] 田中政子:Personal Space の異方的構造について, 教育心理学研究, pp. 223-232, (1973)</p> <p>[4] 和田さゆり:性格特性用語を用いた BigFive 尺度の作成, 心理学研究, 67, 61-67, (1996)</p> <p>[5] 齋藤崇子, 中村知靖, 遠藤利彦, 横山まどか:性格特性用語を用いた BigFive 尺度の標準化, 九州大学心理学研究, 2, 135-144, (2001)</p>			